シンポジウム 4

感染症パンデミック時にプライマリケア医はどのような研究ができるか ～COVID-19 パンデミックを振り返って～

2019 年 12 月、中国・武漢市で発生した未知の急性呼吸器感染症は、瞬く間に世界中に広がり、COVID-19 パンデミックとなりました。数年間にわたり、人類はこの未知の感染症と闘い、大量の科学的エビデンスが次々と発信されました。プライマリケア医は、このエビデンスの恩恵を受けつつ、時には情報の多さに戸惑いながらも診療現場に立ち続けました。中には、自らエビデンスを発信した医師もいましたが、日本のプライマリケア医で積極的に発信できた者は限られていました。

将来的に再び感染症パンデミックが発生する可能性は高く、その際にプライマリケア医がどのように貢献できるか、特にエビデンスを発信するためには迅速な対応が求められます。本シンポジウムでは、感染症の専門家である山本舜悟氏が、COVID-19 パンデミック中にどのようなエビデンスが発信されてきたかを概説します。また、診療現場や大学アカデミアにおいて COVID-19 関連のエビデンスを発信してきた徳増一樹氏、山本洋介氏に、それぞれの研究成果をご紹介いただきます。これらの知見をもとに、今後の感染症パンデミック時にプライマリケア医がスピード感を持って研究を行うためにはどうすればよいか、また平時からどのような心構えが必要かについて提言を行います。